

Title	工業化過程におけるマルクス主義の動態
Sub Title	Dynamics of Marxism in the process of industrialization
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1962
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.35, No.11 (1962. 11) ,p.70- 95
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19621115-0070

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

工業化過程におけるマルクス主義の動態

奈 良 和 重

—

後進地域は、伝統的社會から近代的社会への移行的段階にある。この移行的段階における變動過程は《西欧化》、《近代化》、もしくはよりひろく《文化変容》と呼ばれている。これらのターミノロジーの問題にいま立入るつもりはないが、それらはまさに判断するものが判断したいと思つている基準によつてさまざまであり、パロキアルな、時としてきわめてイデオロギー的な価値判断をひそませていることも争い得ない。それに対してわれわれは、後進地域における移行過程を、移行的体制のい、かんを問わず、《工業化》過程としてポレミックに把握することが可能である。後進地域に発生しつつある現象は、西欧における産業革命以来の近代的テクノロジーの導入と、それによつてもたらされる經濟發展と社会の構造的變動の過程であるということができよう。

後進地域においては、「工業化はしばしば、予想し得る未来のゆたかさのヴィジョンと同一視され、それ自体が有力な政治的力となつている。」⁽²⁾しかしながら、工業化へのプロメテウスの衝迫は、かならずしも適切な結果をもたらさず、むしろそ

れによつてもたらされる文化的乖離性が反作用的革命のポテンシャルを高めつつあることは、工業化過程の進行にともなうもつともクリティカルな問題である。後進地域の多くの場合には、「旧いものと新しいもの、進歩と後進性との並存という」ことは、それぞれ異つた種類の問題が同時的に体験されることを意味する⁽³⁾のである。しかもS・リップセットが指摘するように、工業化が急速に起るところではどこでも、前工業的状況と工業的状況とのシアープな不連続性を招きながら、極端な労働者階級運動を現出させている。この命題は、とりわけ共産主義が低所得水準諸国のみでなく、新たに工業化しつつある国家群に見出されるということ、すなわち工業化過程と共産主義との相関性を示唆している⁽⁴⁾。このことはもつとも現代的な問題であつて、後進地域における工業化の政治的状況を鋭く提示するものである。そこには、共産主義への反応、あるいはその影響に対して、いわば自然状態のセッテングが備えられていると言つても言い過ぎではないであろう。

ところで、今世紀における共産主義的革命のエピソードは、マルクス主義が工業化された地域ではなく、非工業的な、農業の支配的地域において成功したことを物語つている。この事實は、マルクス主義的にみて、たしかに「マルクス主義のパラドックス」⁽⁵⁾というほかない。「共産主義は、マルクス主義の教義によつてそれがなし得るであろうとすこしも期待されてなかつたところで、はじめて権力を獲得したということは驚異すべき事實である。ロシアにおける一九一七年から中国における一九四九年に至るまで、すべての場合、共産主義は不満を抱いた農民層を背景として勝利に導かれた。工業化された《プロレタリア的》国家において、それが勝利に近づいたことはいかなる場合にもないのである。その限りで、共産主義とはつねに、プロレタリアートなき《プロレタリア》革命、すなわち、農民の不満の共産主義的マネージメントの問題であつた⁽⁶⁾」。

もちろん、このような議論は、非マルクス主義者の皮相な感情的アンティパシーとしてよく聞かれるところであるが、そのような場合は別として、それ自体けつして誤りではない。皮肉なことに、もつとも工業化された《先進的》地域と、その

逆にもつとも工業化されてない《後進的》地域とでは、いずれにもマルクス主義への適応性がみられず、まさに工業化の進
行しつつある農業社会に形成されてくる《マルクス主義的状况》に、マルクス自身それに注意を払つたと否にかかわら
ず、マルクス主義のダイナミックスが強く示されている。ということは、マルクス主義がパラドックスであるがゆえに誤り
なのではなく、むしろパラドシカルに現実の正しいロジックであることを、あらためて提示している。このような歴史的
現実こそ、今日われわれをしてマルクス主義を考え直させる重要な素因となつている。過去一世紀のあいだ、マルクスの予
言の諸結果がひとつひとつ放棄され、ついにそれが「誤つた神託」にすぎないことが証明されていながら、それにもかかわ
らず、いまなおマルクス主義が生き延びているヴァイタリテイの源泉とはなんであろうか、われわれはそれを探りあてるこ
とによつて、マルクス主義のリアルな意味を問わねばならない。

工業化過程におけるマルクス主義の動態的ロジックは、たとえマルクスの定式化した歴史法則の必然性に反則するもので
あつても、またそれ自身が否定されるべきものであるとしても、⁽²⁾あらたに照明をあててみなくてはならない現代的問題であ
る。この小稿では、イギリスとロシアの工業化過程を取りあげ、なぜ前者が非マルクス主義化し、後者がマルクス主義化し
たか、その移行的パターンの対照的問題状況をあきらかにしながら、工業化の初期的段階にある後進地域に、きわめてアク
ティヴに作用しつつあるマルクス主義的状况の《再生産過程》を一般的に把えてみたい。

(1) westernization, modernization, acculturation のほかに、secularization, rationalization もしくはまた social mobilization といった用語も使用
されている。《伝統的》なものと《近代的》なものとの混合形態を指示するものは、"amalgamate" patterns というのが適切であろうともいわれ
づゝぬ (Dankwart A. Rustow, *Politics and Westernization in the Near East*, Center of International Studies, Princeton University,
1956, pp. 5-6.)

(2) "Introductory—Political Change and Modernization," Roy C. Macridis and Bernard E. Brown (ed.), *Comparative Politics: Notes and
Readings*, Homewood, Ill., The Dorsey Press, 1961, p. 434.

- (3) Robert V. Daniels, *The Nature of Communism*, New York, Random House, 1961, p. 250.
- (4) Seymour M. Lipset, *Political Man: The Social Bases of Politics*, New York, Doubleday & Co. Inc., 1960, p. 68.
- (5) George H. Sabine, *Marrism, Ithaca*, New York, Cornell University Press, 1958, p. 3.
- (6) David Mitrany, *Marx Against the Peasant: A Study of Social Dogmatism*, (second impression) London, George Weidenfeld & Nicolson, 1952, pp. 226-227.
- (7) Hugh Trevor-Roper, "Marxism and the Study of History" *Problem of Communism*, Vol. V, No. 5, September-October, 1956, p. 40.
- (8) K・ホーバーはこのような立場を典型的に代表する。Karl Popper, *The Poverty of Historicism*, London, Routledge & Kegan Paul, 1957. (なお、拙稿「歴史の予測と社会的実践の科学性について」本誌第三十三卷第二号、五四三—五六六頁参照)。

二

いささかりリカルな、慄然としたトーンで、マルクスは一九世紀前半の西欧における工業化について、つぎのように書いている。「ブルジョワジーは、彼らの百年たらずの階級支配のあいだに、過去の全時代をあわせたよりもいつそう大量で巨大な生産力をうみだした。自然力の征服、機械の使用、工業と農業とへの化学の応用、汽船、鉄道、電信、世界のあらゆる地方の開墾、河川航路の開発、魔術でもつて地下からよびだしたようなおびただしい全住民群——これほどの生産力が社会的労働の胎内にねむつていることを、過去のどの世紀が予想したであろうか？」⁽¹⁾

このように、工業化のインパクトは、西欧の社会・経済的諸関係に対して決定的な構造的変動をもたらした。工業的社会への移行がもつとも典型的におこなわれたイギリスでは、一七六〇年から一八四〇年にかけての歴史的時期が伝統的に《産業革命》と呼び慣らされている。イギリスにおける産業革命の諸結果は、当時他のどこにもまして、深刻な混乱状態をひき起していった。マルクスの引用句にも示されているように、工業化という現象をわれわれはテクノロジーの進歩として、工場とか鉄道、運河の建設などによつて視覚化し、あるいは、資本蓄積とか経済成長率といった抽象的用語をもつて思考する

ことに慣れているが、工業化しつつある社会においては、新しい生活様式はけつして快適なものではなく、それに対応する人間的反応の問題がアキエートに提起されたのである。すでに一世紀以上ものあいだ、高度に工業化された社会のうちに、それに適応的な慣習と技術を身につけて生活しているわれわれにとつては、工業化のこの初期的段階における苦痛に充ちた《革命》の全体的複合性をもはや認識することが困難である。

われわれは、マルクスが知っていた工業的社会というものは、その《生産力》の発展の初期的段階——今日の段階からみれば殆んどその端緒——でしかなかったこと、それゆえに工業的社会を生みだしてゆく苦痛が堪え難いまでに感じられたことを理解しなければならぬ。十九世紀の前半には、工業化の進行によつて、農民、家内工業労働者および新たに近代の工場にレクルートされた労働者たちは、事実、家内工場よりも工場労働に従事すればより高い賃銀を支払われたにせよ、いまだ工業的社会そのものに慣習化されていなかつたのである。⁽²⁾ 固定的な農村的コミュニティから工業的社会への転化のプロセスから析出されてくる工業的労働者は、いまだに農民的メンタリティを抛棄することなく、新しい工業的プロレタリアートにもなりきれず、したがつてもつとも鋭くマルクスの疎外感を意識させられる。したがつて、「もつとも直接的な意味において、工業化とは機械への適応である」とすると、その初期的段階において、労働者階級が工業化に対する烈しいプロテストをおこなうことは必然的であり、かれらは反工業主義的感情を抱かざるを得ない。むろんかれらは、伝統的社會のうちにあつて、精神的にも経済的にも安定していたわけではない。労働者階級は、貧困、搾取、自然的凶作に絶えず悩まされた生活状態におかれてきた。それゆえ、「貧困というものは、この抬頭しつつある労働者階級にとつて新しい体験ではなく、工場規律と伝統的生活様式の崩壊こそ新しい体験なのである」⁽⁴⁾。

十九世紀前半のイギリス企業家、資本家階級の冷酷な搾取は、工業労働者のプロレタリア化をますます造成してゆくが、かれらの階級《意識》といつたものは、貧困そのものに対して感じられたのではない。つまり、経済的貧困≠プロレタリア

化とみずからの不運が意識的に結びつけられたのではなく、むしろ工業化によつてもたらされた伝統主義との断絶が、かれらの自己疎外⁵社会的孤立化をひき起し、かれらの日常的生活体験における《変動》をいわば *disorder* として鋭く意識化させたのである。この意味で、一八四八年はまづたく、マルクス主義的であつたし、「共產主義の妖怪」は実感的に受けとられていたといつてよい。「マルクスの体系と哲学を構成する思想を跡づけるにあつては、マルクス以前の思想家たちを指示するのが慣例である。だが、一八四〇年代の思想と情緒の流れを踏査してみると、不可避的であるとマルクスが宣言した歴史的進行のコースは、すでに多くの急進主義者によつてそのように受けいれられていたからこそ、不可避的たらざるを得ないという結論を、かれは容易に引き出し得たということ、このことはあまり広く認識されていない。逆にそのことは、ドラスティックな変動を嫌う人びとによつて、恐怖の念で見られていた。当時はいまだに、不可避的のようにみえる傾向をひとつの系統だつた全体にたぐり寄せる統合図式に欠けていた。そして、それをなすことがマルクスの仕事であつた。」⁶このように、マルクスの思想は、その歴史的時代のもつムードの本質を正しく反映していたのである。この点、われわれは、マルクス主義の全思想の難澁さとかその部分的誤りはともかくも、工業化の進行しつつある社会において、それが大衆はもとより知識人にまでアピールする強情な性格を問題視しなければならぬ。

ところで、マルクス主義的分析にしたがえば、工業化の進行が貫徹されたイギリス——十九世紀の終りまでに、工業の優位性が確立されたヨーロッパの唯一の国——において、最初に革命が発生する予定であり、エンゲルス自身、その時期が遠からず到達されるであろうと考えていた。⁷しかし、マルクスがその理論を定型化するや否や、「一八五〇年以後、《マルクス主義的状况》は、イギリスの場面から永久に消え去つてしまつた」⁸のである。そして、それ以後のイギリス社会主義の発展に、マルクス主義はもはや不在となつた。このことは、イギリス社会における工業化過程でマルクス主義的状况がまさに不可避的であつたにもかかわらず、イデオロギーとしてのマルクス主義の没落を不可避的ならしめたことを意味する。マルク

スの描いた資本主義の発展図式は、一方に工業ブルジョワジーが他方に工業プロレタリアートが分極化し、この対立的階級闘争は、終局的に、革命によつて資本主義体制そのものを顛覆させる、というものであつたが、イギリスにおける資本主義の発展は、この例外的ケースをなすものであり、われわれはその理由を明確化しなければならぬ。

すでに述べたように、工業化＝資本主義の発展は、大量の労働者を工業労働者へと転化させ、かれらを伝統的生活様式からはじき出した。ブルジョワジーは、かれらの労働と余暇のリズムをまったく《革命化》し、伝統主義的経済生活に対しては、サディスティックなほどに偶像破壊的であつた。十九世紀初期のブルジョワジーのリベラルな精神構造は、階級的利己心というより、「工業化の祭壇にマゾヒズム的自己犠牲」を献げ、「工業化と近代化の社会的使命感、イングランドと果ては全世界とを迷信と後進性から救済しようという必然的にして、かつ不可避的な課題を遂行する社会的使命感」に燃えたぎつていた。それと対照的に、旧きイングランドを破壊した工業的社会的あらゆるものに、いまだ工業主義と馴染めない労働者階級が、なかば郷愁的な、そして極度に反抗的な革命的ポテンシャルをたたえて、敵意をばらまいてゆくのもまた当然であつた。R・ペンディックスはつぎのように言つてゐる。「工業化は、労働の伝統主義を脅かし、しばしばそれを破壊した。イギリスの農民および労働者の大多数は、このようなかれらの生活様式の崩壊にプロテストして、社会における自分たちの失われた地位を取り戻そうと努力することにより、一致した行動へと呼び醒まされていつた。ひじような苦悩にさいなまれて、種々の労働者階級運動の指導者たちは、《旧き良き時代》への郷愁的訴えをもつて、人びとの伝統的地位を飾り立てがちであつた。現在の苦渋と想い出の情緒的破綻との対照は、不可避的に、過去の敵しい現実に対してロマンティックな輝きをあたえたのであつた。しかしながら、うつろにされた伝統へのこのようなアピールは、伝統主義のイメージが理想化する諸々の慣習を、非農業的労働力の強烈な創造力がしだいに掘り崩してゆくさ中に、工業のおよぼす諸結果に対する労働者たちのプロテストが意識的に伝統主義のイメージに頼つてゐることを際立たせるに役立つのみである」と。

工業主義とは、言葉のもつともメカニカルな意味において、生活の規律性あるいは規則性^{レギュレーション}を強制し、「画一化への傾向」を不断に推進する。そのため、労働者階級に対しては、新しい工場組織の訓練を強要し、労働の遂行にとつて必要な内面化された倫理^{II}を要請する。こうした工業主義の重圧に対する反工業主義的リアクションの明白な例を、われわれはウィリアム・コベットに見出すことができる。かれのラディカルな思想は、貧困者や被搾取者に対する憐愍、搾取者や特権階級に対する憎悪で充たされていたけれども、それは反工業主義的な忿懣^{II}のたうち廻り、新しい秩序への無理解な敵意以外のなものでもなかつた。それはひとつの情緒ではあつたが、イデオロギーではなかつた。だがまさに情緒であつたがゆゑに、かれの思想は当時のプロレタリアートの心情の琴線に触れ、かれらのアナキズムの情念をかき立てていつたのである。工業化の初期の段階においては、こうした反工業主義が、資本主義と直接的に同調し、農民および労働者のうちにある革命的エネルギー源が、資本主義の顛覆に実践的意味を見つけたしてゆくのである。

一八三二年の選挙法改正 (The Reform Act) は、イギリスにおけるブルジョワ・リベラリズムに新しい時代の転機を劃した。それとともに、みずからの地位を向上させるための労働者階級の政治運動も、チャーティズム運動の展開として明確な姿をとつてゆく。一八三八年の「人民憲章」(People's Charter) に表現された諸要求は、たんなる時代錯誤的プロバガンダではもはやなく、労働者階級自身の工業化への適応を反映したものにはかならない。リベラル・ブルジョワジーの工業的・商業的利益をまず考慮に入れた上での諸改革が、チャーティズム時代の労働者の労働条件に依然として劣悪な多くの障碍を残していたことは疑いない。事実、資本主義のもとにおける貧困化、失業者の産業予備軍、資本家の独占的傾向、これらマルクスのドグマは、かれらの日常的体験に深く浸みこんでいた。とはいへ、すでに十九世紀後半に至つて、チャーティストの政治的訴願が社会的改良を生み出し、一八七一年以後には労働組合運動も合法化された。九〇年代にあらわれはじめた社会政策的方向は、五〇年代にはまったく予想外の事態であつた。

このようにして、イギリスのリベラリズムは、そのリベラルな革命的エートスをむしろマルクス主義に譲り渡しながら、個人主義的なものからコレクティヴィズムへと移行してゆく。他方で労働者階級も、十九世紀末期には、工業的価値への充足感——工業化への適応——をもつようになり、もはやかれらの抱くヴィジョンを田園的過去ではなく、福祉国家的未来へと照射していった。かれらは、ブルジョワ社会のリベラルな諸価値に非難を向けることなく、逆に本質的にはブルジョワ的な生活信条の現実化をめざすこととなる。リベラル・イデオロギーは、いまや新しいタイプの企業家リチャード・コブデンによつて代表され、「穀物法反対同盟」(Anti-Corn Law League)を中心として、人民全体の利益に自主的に奉仕するようになった。こうしたイデオロギーのムードは、それがブルジョワ的であるかどうかは別として、工業的生活様式の現実性のあらわれであり、近代的工業文明の勝利、ひいては、企業家と労働者双方の〈妥協〉を明示するものであるといえる。

ここで、当時の労働者階級の生活意識形態を、サミュエル・スマイルズの言葉によつて示しておくのも無駄ではない。「労働者階級はいまや、以前にもまして市民となつた。かれは是認された権力であり、政治制度の範囲内に受け入れられている。かれにとつて、機械の研究所、新聞、共済組合、文明のありとあらゆる近代施設は豊富にあまつている。かれは知識人の領域に受け入れられている。偉大な思想家、芸術家、哲学者、詩人たちは、時として、労働者階級から身をおこし、知力に階級などなく、高貴に排他的秩序もないと宣言している。文明の影響力は、社会をその深層にいたるまでかき立てつつある。そして、労働者が社会的権力の地位に上昇することは、日々の証拠によつて示されている。不満は存在しようし、たしかに存在する。しかし、不満とは進歩にとつての必要条件にすぎない。人間というものは、そこから立ちあがらねばならないみじめな状態にまず不満をもたなければ、より高い状態へと昇進してゆく刺戟をあたえられないであろうから。満足することは休息することだ。よく弁まえた上で不満であることはかえつて、未来への前進をめざして努力し、労働し、行動することである」⁽¹³⁾。

イギリスにおける工業化の進行は、労働者階級の生活水準を高めたばかりでなく、かれらの政治権力への参加、労働組合の組織化といった制度的保障をとまななながら、はじめに顕著にみられたかれらの反工業主義的・アナキズム的エネルギーを漸次的に稀薄化させ、生活としての工業主義にふさわしい創造的エネルギーへとそれを転換させた。と同時に、イギリス社会主義は、マルクス主義的革命的パターンの否定し、独自のフェビアンズムを形成していった。フェビアンズムとは、工業的文明に対する批判的、再評価としての《意識》にほかならず、「工業主義の非熱情的な、事実的承認であり、かつ社会主義への訴願——といつてそこになんらの情緒主義も込められていない——である。」⁽¹⁴⁾もちろん、われわれは、こうしたイギリス社会主義のメタモルフォーゼが、じつはイギリスの自由貿易主義を背景とした急速な帝国主義的拡大の時期と照応していることを考慮しなければならない。しかもそれこそ、レーニン分析にかかれれば、イギリス・プロレタリアートのブルジョワ化現象である。だが、すくなくともマルクス自身は、そのような発展の可能性がもたらすであろう政治的諸結果に政治的イマジネーションを働かせることはできなかつた。かれは、資本主義的工業化の歴史的発展段階の通過が急速であればある程よく、資本主義の運命を占いつつ、かえつて帝国主義的發展傾向を支持したであろう。イギリス社会の工業化過程を顧みるとき、われわれは、そこにおけるマルクス主義の退行が、ドグマとしての、マルクス主義をいよいよ硬質化ならしめていったという奇妙な現象に出会わされる。ともかく、イギリスの工業化はひとつの歴史的過程を生き切つた。そして、それ自体はユニークな自己形成であつたにせよ、工業化過程でのノーマルな適応の効果がマルクス主義の政治的エントロピーを減少せしめるという典型的なかたちを、われわれに示唆している。「しかし、アナキズムが実践的反応を示さなくなつても、いまだイギリス型の労働組合主義が堅実に安定化されていない社会では、実際に、マルクス主義が社会主義の前衛となるであらう」⁽¹⁶⁾。A・アラムのこの指摘は当を得たものである。

(1) マルクス・エンゲルス『共産党宣言』国民文庫版（大月書店）三三三頁。

(2) Karl De Schweinitz, Jr., "Economic Growth, Coercion and Freedom," *World Politics*, Vol. IX, No. 2 January 1957, p. 176.

(3) Adam B. Uram, *The Unfinished Revolution. An Essay on the Sources of Influence of Marxism and Communism*, New York, Random House, 1960, p. 66.

(4) Reinhard Bendix, *Work and Authority in Industry. Ideologies of Management in the Course of Industrialization*, New York, John Wiley & Sons Inc., 1956, p. 20.

(5) このような疎外の意識は、プロレタリアートの生活環境のドラスティックな変動から受ける心理的レヴェルでの問題だけにとどまらない、とくに、農民的プロレタリアートは、伝統的な農業的社會から工業的社會への形態転化において、かれら自身の財産概念に重大な変化を生ぜしめる。従来、財産＝土地によつて《身分》を規定されてきたかれらは、工業化の初期の段階では、この財産＝身分的關係の崩壊によつて、*declassé*意識を鋭く感じせられる。そして、この意識を克服するには、「一二世代の時間的経過を必要とするのである」(Uram, op. cit., pp. 68-69)。

(6) Oscar Hammer, "The Spectre of Communism in the 1840's," *Journal of History of Ideas*, Vol. XIV, No. 3 June 1953, p. 420

(7) エンゲルスは『イギリスにおける労働者階級の状態』のなかで、「ブルジョアからロンドンにいたる全労働者階級が富者に対して深刻なうらみをいだいているのである。労働者は、富者から系統的に搾取されてから、無情にもその運命のままにみすてられてしまふ。そして、このうらみはあまり遠くならないうちに——その時期はほとんどはかることができる——革命となつて爆発するにちがいない。その革命にくらべると、フランス第一革命と一七九四年とは兒戯に類するものであらう」(傍点引用者)。マルクス・エンゲルス選集(大月書店)補巻2、三三—三四頁。

(8) Uram, op. cit., p. 84.

(9) *Ibid.*, p. 97.

(10) Bendix, op. cit., p. 46.

(11) *Ibid.*, p. 204. 季節的に変化する労働、あるいは家内労働にたずさわつていた労働者の労働のルーティンはきわめてインギニエリーなもので、工場生産組織にとつて不適應である。工場の労働者には、新しい条件のもとで、労働遂行の倫理——労働の強度化、精密性、機械および道具の周到な取り扱い方——を取得させねばならない。

(12) Uram, op. cit., p. 75. 参る Bendix, op. cit., p. 44. 参照。

(13) Samuel Smiles, *Thrift*, London, John Murray, 1875, p. 55. (Bendix, op. cit., p. 113. 参用)。

(14) Uram, op. cit., p. 147.

(15) Karl Popper, *The Open Society and Its Enemies*, second ed., (rev.) London, Routledge and Kegan Paul, 1952, Vol. II, p. 188

三

イギリスの場合とその歴史的コンテクストが異つていながらもかわらず、ロシアの工業化過程も、それと同じような発生的問題をひき起していつた。一八六一年の農奴制廃止は、それまで殆んど停滞状態にあつたロシア社会にダイナミックな社会変動をあたえる契機となり、以来ロシア社会のいわゆる近代化が急速におこなわれることとなる。⁽¹⁾ロシアの工業化は、ツァーリズムの庇護のもとで、主として外国資本によつてまかなわれ、土着の企業家階級は一九世紀後半に至つてようやく発展しはじめた。ロシア社会は、一八八〇年代の終り頃から九〇年代にかけて、急速な工業化段階に入り、ウィットの時期には、その工業成長率は世界でも最高水準に到達したといわれる。ツァーリ政府は、この工業化過程において、企業家の恣意の経営に干渉せず、労働者階級に対して積極的に制度的保障をあたえようとすることなく、むしろかれらの弾圧に傾注した。⁽²⁾政府官吏も、労働関係の規則がかえつて労働者に不満の公的承認をあたえることに極度に警戒的であつた。しかもかれらの反抗が過激化すれば、警察力に頼るほかなく、「残酷な騒動鎮圧が《アナーキズム》の拡大を防遏し得ないことが分ると、政府自身がこの害悪に対する反動を組織化しようとするのが当然であつた」⁽³⁾。ツァーリズム体制は、こうした成行きにみずから身をまかせながら、ついに一九〇五年の革命をむかえるのである。

農奴解放後二世代もたたぬうちに、身分を失つたロシア農民は、直接的に多くの土地を要求する政治的プロテスタを激情的になしていつた。他方、当時のロシア労働者はいまだ完全に工業プロレタリア化されずに、半ば農村的(半農半工)性格を強くとどめていたのである。⁽⁴⁾ヒューマニスティックに農村の田園生活を讚美し、工場労働における道徳的墮落をいやらしく批判したこの時代の知的論争こそは、殺風景な現実に対してロシア的郷土をレトリックに粉飾するものにすぎなかつたとし

でも、工業労働者自身に工業化の進行過程に馴化されていなかつたかを雄弁に物語っている。農民と労働者にただ要求されてきた権威への無条件的服従は、不当に剝離されているとかれらの感情を深めるのみで、その裏側に革命的ポテンシユアルを蓄積させ、アナキズム的炸裂を余儀なくさせたのである。一九〇五年、ペテルブルグにおきた事件をはじめ、主要都市でのゼネラル・ストライキ、相つぐ農民一揆、海軍兵士たちの叛乱等々、いずれもこれらの革命的行動は、本質的にアナキズム的であつた。はじめて議会が設立され、個人の諸権利が承認されるにいたつたのは、同年十月になつてからのことである。

ストルイピンの改革は、こうした無秩序状態に対応するものであつた。すなわちそれは、進行しつつあつた農村の資本主義化に即して、ミールを解体し、農家の保有地を整理し、解放後の土地の年賦支払を除去するとともに、土地を買うための融資を受けられるようにし、さらに貧農は土地から《分離》できるように農業問題の解決をはかるものであつた。さらにその改革は、工業化の促進に有利な方法を取りながら、「革命的プロテストを改良主義に転換し、労働者と農民からそのアナキズム的、それゆえ革命的性格を剝奪するような制度的・社会的枠組を工業化のために準備する」ことを目的としていたのであつた。ここで、歴史に向つて《もしも》と問うことは、けつして歴史への恨みがましい繰り言ではない。つまり、ストルイピンの意図がもしロシアで制度化されたとしたら、そしてロシアに戦争と敗北とが襲わず、あるいはそれがもう十年後、工業化の進展、農村中間階級の成長、議会議の慣行がある程度安定化してからであつたとしたら、事態は相当變つたであらうし、おそらくポリシエヴィキは、ロシアの社会主義運動史上に、フアナティックな、あまり重要でない形勢をとどめるだけに終つたかも知れない。しかしながら、ロシアにおいては、まさにマルクス主義的解決が《必然的》であつたのである。それは、偶然的あるいは人為的なものいかにかわらざ歴史の**実体的**、**ディアレクティック**を確信するものの、文字通りマルクス主義的意味での《必然性》ではむろんなく、むしろ工業化のコロラーリとして《必然的》であつたというこ

と、しかもそこで《必然的》であつたのは特殊レーニンの権力体系としてであつたということである。この意味において、一九一七年のロシア革命はけつしてパラドクシカルでなく、まさにマルクス主義の成功のテスト・ケースであつたのである。さて、ロシアにおけるマルクス主義の発展は、《自然発生性》と《意識性》との二つの範疇のあいだにさまざまな陰影を含みながら、ついにポリシエヴィズムへと収斂する。ポリシエヴィキの、社会革命党（エス・エル）およびメンシエヴィキに対する闘争は、労働者と農民の自然発生的力との徹底的闘争であつた。ナロードニキの伝統を引き継ぐ社会革命党は、ロシア農民の伝統的共同体基礎をおく農民的社会主義を主張し、反工業主義的・アナキズム的傾向がもつとも濃厚であつた。ロシア・マルクス主義は、まさにナロードニキの内部から、それと対立しつつ生成し、それとの闘争において発展を遂げてきたのである。ポリシエヴィキは、メンシエヴィキと異なり、それとの決定的分裂が示すように、階級《意識》的政党である。すなわち、レーニンが『なにをなすべきか？』においてその組織原理を定式化したように、ポリシエヴィキは、革命への自然的衝動、あるいはそのたんなる反映としての政党ではなく、マルクス主義的階級意識に透徹された職業的革命家のエリート主義でなければならぬ。レーニンの先鋭的意識は、労働者階級がみずからの力で発展させ得るのは労働組合主義的意識のみで、真にプロレタリア的階級意識は《外部から》しかもたらし得ないことを見透している。「だから、われわれの任務、すなわち社会民主主義者の任務は、自然発生性と闘争すること、ブルジョワジーの庇護のもとにはいろうとする組合主義のこの自然発生的な志向から労働運動をそらして、革命的社会民主主義の庇護のもとに引き入れることである」。

レーニン主義とは革命的マルクス主義である。かれにとつて、マルクス主義のどの部分がロシアに適用可能かをこと細かに穿鑿することが問題ではなく、焦眉の問題はその直接的・目的のための戦術と闘争形態であつた。ロシアにおけるマルクス主義は、経済闘争でもなくテロリズムでもなく、階級闘争であり、なににおいても革命である。ところで、一九〇五年の革命が教えた教訓とは、農民とソヴェトとの自然発生性のもつ重要性であつた。かれらの原生的ともいふべき反工業主義的ア

ナーキズムは、革命の成功にとつてけつして否定されるべきものではなく、ツァーリズムの諸改革の目的とするところが、その官僚機構のマネージメントによつて自然発生的な力からその革命性をいわば自然消滅させることにあるとすれば、ここに提起された問題は、この自然発生的な力の潜在エネルギーを革命の推進力として逆に取り入れることである。したがつて、レーニンの転回は、つぎのように示される。「一九〇五年以後のレーニンの見解では、社会主義政党的任務は、《自然発生的と闘争すること》がそれ程重要とならず、むしろ自然発生的性に屈従することなく、革命的な自然発生的性をマネージしてゆくことが重要なこととなる⁽¹¹⁾」。一九一七年における効果的スローガン——「すべての権力をソヴェトへ!」「土地を農民へ!」——は、まさにポリシエヴィキが、その党の内部組織をのぞいて、他のあらゆる面でアナキストとなつたことを証明するものである。すなわち、ポリシエヴィキの《民主的集中制》は、内部においてポリシエヴィズム化するとともに、外部に向つてますますアナキズム化していつたのであり、マルクス主義が成功するためには、まずアナキズムでなければならぬことをあざやかに示している。

一九一七年の革命後、社会革命党は自己分裂によつてその組織的欠点を暴露し、メンシエヴィキはマルクス主義に忠実である美点のために自己敗北する。ポリシエヴィキの勝因は、それらのいずれでもなかつたこと、つまりアナキズム的革命状況とマルクス主義とのユニークな綜合に負つている。そして注目すべきことは、権力獲得後、ポリシエヴィキは、革命的アナキズムと正反対のレーニンの再転回をなし遂げることが可能であつたことである。この事實は、しばしばレーニン主義のアンビバレントな性格、あるいは政治的マキアヴェリズムとも見なされているけれども、それは解釈の問題にほかならず、レーニンの政党的マルクス主義であるがゆえに、革命にあつてアナキストとなり得たし、革命と内乱が完了するや否や、踵を返してアナキストを締めだして、近代史上でもつとも集権的・絶対的國家を建設しはじめることができたのである⁽¹²⁾。荒廃したロシア社会の再建と、社会主義國家の建設という課題遂行は、レーニンの政党的のみがみずから試みようとし、

實際それを一挙に試みたのであつた。そればかりでなく、いまだ完全に資本主義化していなかつたロシア社会の《後進性》に對して、したがつて工業の權威と労働の組織が明確に構造化されてなく、労働者階級自身がアナキズム的エートスを、農民的メンタリテイを拋棄することなくもつていて、なにが起りつつあるのかを理解できず、起りつつあることに嫌悪しがちな状態に對して、確信に充ちたマルクス主義的革命的目標を定位し得たのは、レーニンの党のみであつた。

しかしながら、革命の技術として成功を取めたマルクス主義は、ロシア的条件のもとにおいて、社会主義国家の建設作業の技術として適切であつたらうか。じつは、一九一八年のレーニンの言葉からも推察されるように、ロシアの工業化の課題は、もつとも困難な状態から出発しなければならなかつた。「われわれロシアのプロレタリアートは、われわれの政治体制にかけては、労働者の政治権力の強さにかけては、どんなイギリス、どんなドイツよりも進んでいるが、それとともに、よく秩序だつた国家資本主義の組織という点にかけては、文化の高さの点にかけては、社会主義を物質的・生産的に「導入」する準備の程度にかけては、西ヨーロッパのもつともおくれた国家よりもおかれている……」⁽¹⁵⁾。そもそもマルクス主義とは、資本主義の崩壊の論理的帰結であるか、あるいはその完結としての論理的継承であるか、いずれにせよポパーのいわゆる《歴史主義》の範疇に属するもので、それ自体社会的テクノロジーではなく、純粹に、歴史理論であるにすぎない。したがつて、「マルクスはすべての社会的テクノロジー——それをかれはユートピア的と非難した——を實踐的に禁止したがゆえに、かれのロシアの使徒たちは、工業社会の領域におけるかれらの偉大な任務に對して、なんらの準備もなかつた」⁽¹⁶⁾わけであり、ロシア的条件のもつでのマルクス主義は、革命的段階がすぎ去ると、革命的マルクス主義からマルクス主義的資本主義の構築へと変転し、アラムの言うように、《二段階》のイデオロギー⁽¹⁷⁾とならざるを得なかつた。

事実、一九二一年には新経済政策(NEP)へと政策転換を余儀なくされ、その直接的原因となつたクロンシュタットの叛乱によつて、政治的危機も頂点に達した。そして一九二二年以後、スターリンは一方においてアナキズム的・民主的党派を

排斥しながら、⁽¹⁸⁾他方でマルクス主義の古典的問題——《社会主義への移行》と《工業化の方法》——に直面していった。ソヴェトの工業化の課題は、ポリシエヴィキが完全に権威主義的政党となり得たスターリンの時代から開始された。実際に革命後十年を経て、「共産党と政府が経済成長率を加速化し、かつイギリスと西欧とが《自然発生的》手段を介してなし遂げた工業的地位を獲得しよう」と意識的に試みた、一九二八年の計画時代の開幕から、ロシアの産業革命がはじまる⁽¹⁹⁾のである。スターリンは、党内肅清をとまなう権力のモノリット化を不断にすすめ、工業化を急速度に完成させてゆく。スターリン主義の実践的帰結は、こうした内部発展と、さらに国際関係とも密接に絡み合つて、一九三〇年代のソヴェト共和国を徹底的な全体主義社会と《外国嫌い》の社会につくりあげたのであつた。このプロセスの政治的分析にはここで立ち入らない。もつぱら工業化との関連においてスターリン主義の意味を把握すると、それはまさに「工業化の物神性」⁽²⁰⁾にひとしく、「マルクス主義の革命的精神に対するその論理の勝利、すなわち強権的国家、工業的社会および科学的精神をもつた社会の創造」⁽²¹⁾と
いうことである。

マルクス主義的イデオロギーの作用的役割とそれへの慣性化を強制してゆく工業化のバターンは、イギリスの場合よりはるかに強度で、一層ドラマティックな発現形態を示した。この過程に、工業化の初期的段階における問題状況が再生産されることとなるが、すでにマルクス主義が他の競争的イデオロギーの存在を許さず、上から容赦なく農民および労働者の自然発生性を抹殺していった。とくに、《農業集団化》政策は、ソヴェトの工業化とその結果としての構造的変化を典型的に顕在化せしめたが、農業生産に対する政府のコントロール、工業労働への労働力の解放、さらには工業的カウンター・パートとしての農民の農業労働者への転形、といった強制的な方法は、すでに小土地所有者としての心理的構造を備えた農民の抵抗に出会つて、スターリンの不感症的、犯罪的な決断をもつて処罪されねばならなかつた。「幾百万のプロレタリア大衆に対して堡して規律と組織の精神を鼓舞し、そうすることによつて、大衆のうちにプチ・ブルジョワ的慣習の腐蝕的影響力に対して堡

聖を築くという意味において、党はプロレタリアート独裁の手段である⁽²²⁾。スターリンの党のリーダーシップとその厳格なマネージメントによつて、劣つたロシア労働者から「新しいソヴェトの人間——その心理において唯物論的であり実用主義的であり、かつ党の命令とプロパガンダに自動的に反応する——」⁽²³⁾を創造すること、これが労働者階級の前衛としての党の任務であつた。一九三〇年代には、工業化と集団化の《官僚機構化》とパラレルに、ソヴェト社会のあらゆる側面に、社会主義的規制を反映した生活意識が定着する。こうして、ソヴェト労働者階級は、工業主義へ服従することによつて、ソヴェト《市民》権を獲得するにいたつた。かれらにはストライキ権は否認され、その労働組合は党の命令に服するのみであるにせよ、いまやかれらは、ソヴェト体制において地位を制度的に保障されたのである。一九三六年のスターリン憲法は、この社会主義発展段階のランドマークを明確にしつづけたものである。

(1) Cyril E. Black, "The Modernization of Russian Society," Black (ed.), *The Transformation of Russian Society*, Cambridge Mass., Harvard University Press, 1960, pp. 661-680.

(2) ツァーリズムは、一九世紀を通じて、幾度か工場立法を実施し、労働関係を規制した。したがつて、労働者階級にまつた、制度的保障が果たえられなかつたわけではなかつたとしても、それらは労働者の騒動が烈しさを加える度に、企業家を保護するためのものであつたことは疑いなく、(Bendix, *op. cit.*, p. 181.)

(3) *Ibid.*, p. 188.

(4) 農奴解放は、その改革的ムードにもかかわらず、《解放された》農民にとつて欺瞞的なものにすぎなかつた。農民は土地買戻の過重な年賦金に苦しめられ、従来と変わらず土地に束縛され、封建的用途に服さざるを得なかつた。農奴解放は、かえつて土地分配の不平等をもたらし、地主と農民との階級対立を尖鋭化させた。他方、ツァーリズムは一八六一年以後も、依然としてミールの伝統的制度を保存し、農民の伝統的愛着をつなぎとめ、かれらの移動を阻止した。ミールは前工業的遺物として保守主義の温床であつたが、農村における資本主義の浸透とともに、それも次第に富農の支配に移行し、貧困な農民のアナキズムの貯蔵所と化してゆく。

(5) 具体的に示すと、たとえば、一八七九—八五年のモスクワ地区の数字では、労働者の三分の二は新たに工業労働力としてレクルートされたもので、その数の約三分の二は、工場に雇用されてから六年以上たつておらず、残りの三分の一は、七—十五年の雇用期間を経たものであつた。他の地域においてもほぼ同様に、一八八〇年代に工場労働者化したものが高い比率を占めている。労働者階級の出身をみても、一九世紀の最後

の二十年間では、平均して九〇%までが農民の息子であり、しかも父親の四五―六〇%は工場労働の経験をもっていない。それゆえに、ロシアの工場労働力の交替が頻繁におこなわれたことから判断しても、労働者と農村との結びつきはかなり強く残されていたことが明瞭である (Bendix, *op. cit.*, p. 177)

(9) Uiam, *op. cit.*, p. 187.

(7) *Ibid.*, p. 180.

(8) Leopold H. Hainson, *The Russian Marxists and the Origins of Bolshevism*, Cambridge Mass., Harvard University Press, 1955. 参照

(6) Alfred Meyer, *Leninism*, Cambridge Mass., Harvard University Press, 1957, p. 113.

(10) レーニン『なにをなすべきか?』レーニン全集(大月書店)第五卷四〇六頁。

(11) Uiam, *op. cit.*, p. 186.

(12) *Ibid.*, p. 191. アラムはまたつぎのように指摘する。「マルクス主義のうちには、一九一七年のポリシエウイキをして、農民の希求に反応し——不誠実にはなく——都市プロレタリアートに対するリーダーシップを獲得せしめるような反工業主義とアナーキズムのなまのアピールが充分ある。政治・経済的發展のノーマルな(自然発生的)状態のものでは、多分その教義の決定的欠陥であつたものが、一九一七年のアナーキーの状態のもとでは、勝利への鍵であることを証明した」(*Ibid.*, p. 180.)

(13) Meyer, *op. cit.*, p. 287.

(14) Uiam, *op. cit.*, p. 191.

(15) レーニン『左翼的』な見識と小ブルジョワ性について、全集第一七卷三四九頁。さらに、レーニンは「ソヴェト権力の当面の任務」においても、「ロシア人は先進諸国民とくらべると働き手としては劣つている。ツァーリズムのもとでは、また農奴制の遺物が生きのこつているあいだは、そうなるよりほかなかつた。働くことを学ぶこと——ソヴェト権力はこの任務を全面的に人民のまえに提起しなければならない。この点での資本主義の最初の成果であるテラー・システムは、——資本主義のいつさいの進歩と同様に——ブルジョワ的搾取の洗練された残忍さと、一連のきわめて豊富な科学的成果……とを、そのなかにかねそなえているのである。ソヴェト共和国は、この分野での科学と技術の成果の貴重なものはすべて、どうしてもみならつて自分のものとしなければならない。社会主義を実現する可能性は、われわれが、ソヴェト的管理組織を、資本主義の最初の進歩とむすびつけることに成功するかどうかによつてこそ、きまらるであらう。われわれは、ロシアでテラー・システムの研究と教習、その系統的な実験と応用とをやりはじめなければならない」(同上二六一頁)。

(16) Popper, *op. cit.*, Vol. II, p. 83.

(17) Uiam, *op. cit.*, p. 200.

- (18) ポリシエウイキは、党内部の「労働者反対派」および「民主的中央集権派」を排除して、権威主義政党となった。その中央集権的国家Ⅱ党と工業化Ⅱ社会主義国家の建設とは、過去のポリシエウイキの革命的スローガンとまさにアンティテーゼをなすものである。
- (19) Schweitzer, op. cit., p. 182.
- (20) Daniels, op. cit., p. 261.
- (21) Uiam, op. cit., p. 223.
- (22) Bendix, op. cit., p. 346.
- (23) Uiam, op. cit., p. 215.

四

ソヴェト社会の工業的發展において、スターリン主義が必然的段階であつたとすると、今日の非スターリン化の政治はなにを意味するであろうか。それはクレムリンの内側でのたんなるパーソナルな権力闘争の合理化にとどまらず、ソヴェト体制の自己完結とその安定化——スターリン時代の病的全体主義から《正気の》全体主義への転成——を示唆している。このことは同時に、体制内部におけるマルクス主義の歴史的役割に大きな問題を投げかけている。ここでイデオロギーの終焉になにかオプティミスティックな見解を述べることが目的ではない。けれども、ロシアにおけるマルクス主義が工業化のためのイデオロギーの担い手であつたとすると、工業化された段階において、その革命的意味と機能が失なわれてゆく危険性は、まさに工業化の成熟にともなう内在的ロジックであるように思われる。アラムが指摘するように、イデオロギー的世俗化の進行は、ソヴェト市民の意識的レヴェルにイデオロギー的厳しさを喪失させ、生活の感覺的安逸だけを取り残してしまふデイレンマに当面せざるを得ない。つまり、「日常生活の問題からのイデオロギーの分離、あるいはイデオロギー的不可知論は、しばらくすると、つぎのようなことを意味するにちがいない。個人はたとえ外面的には良き共產主義者であり、み

ずからそのように考えていても、自己の利益とか社会的希求を、党を通じてではなく、むしろ労働組合、職権のレヴェルあるいは経済的階級を通じて表現することとなる⁽¹⁾。ソヴェト社会には、このような新しい階級意識の自然発生性、もしくは強烈な既存のステータス意識と競争とが出現しはじめて⁽²⁾いる。

かつてマルクスが資本主義の発展に不吉なブレイカメントを述べたように、イデオロギーとしてのマルクス主義は生産力の発展の《桎梏》に転化することになるであろうか。それはソヴェトの現実がみずから解答を試みる問題であろう。現在のソヴェト指導者は、体制内部において、重工業の発展、農民問題、消費物資の生産など、イステンシヴな工業化を促進してゆかねばならない。しかしながら、そのような生活水準のひき上げが、社会主義的《改良》としての結果を生み出すことは充分あり得ることである。といつても、そのことをソヴェト体制そのものの分解過程と同一化してはならない。ソヴェト社会にマルクス主義はもはや必要でなくなつたとしても、個人は体制への政治的忠誠を通じてのみ、つねに個人の努力と成功を追求してゆかざるを得ず、この行為的関連はけつしてたんなる作爲的自己欺瞞ではない。さらに重要なことは、ソヴェト共産主義は、体制内部においてそのダイナミズムが涸渇化すれば、その生命の蘇りの活路を体制外部に向つて求めてゆくであろうということ、しかもそれがマルクス主義の歴史的使命と折り重なつたイデオロギー的モティヴェーションを深く内蔵していることを見逃がしてはならない。それは恰も、資本主義の帝国主義的拡大とパラレルである⁽³⁾。現在、こうしたイデオロギー的強迫をもつとも鋭く感じとつてゐるのは、ほかならぬ《後進地域》である。ここに「Whither Marxism?」と問われるゆえんがある。

ところで、後進地域におけるマルクス主義運動は、反西欧的民族主義——とくに植民地的コンテクストにおいて——と歴史的に結びついてきた。この政治闘争は、いうまでもなくレーニンの『帝国主義論』においてすでに提示され、一九二〇年のコミンテルン第二回大会で採択された『民族および植民地問題のテーゼ』において明確化された。以来、コミンテルン路

線は、後進地域、とりわけアジアにおける革命的解放運動にもつとも大きな影響力をおよぼしてきた。共産主義そのものは、農民の不满に直接アピールしたというより、土着インテリゲンチアの極度に思想的な精神状況に感応するにとどまつていたけれども、かれらが土着的反抗と国際共産主義とを結び合わせ、マルクス主義の対外的発展の源泉をなしてきたのである。したがつて、後進地域の共産主義研究においては、コミンテルンの革命的ストラテジーの推移と、それに対応した各国共産党の動向が主要なモティーヴをなしてきたのも当然である。ここでわれわれは、コミンテルン・ドキュメントあるいは共産党史についての問題には触れないで、すでにみたように、イギリスとロシアの工業化過程の「両極端の選択肢の例証」から、工業化の移行的段階における後進地域の問題性を共産主義のアピールとつき合わせて考察するにとどめたい。

各国の歴史的特殊性により、工業化のパターンに固有なニュアンスの差があることはもちろんだが、繰り返し述べるように、工業化の初期的段階では、否応なく《マルクス主義的状況》が体験される。後進地域が急速度の工業化を企図するかぎり、工業主義が労働者のプロレタリア化の心理的危機を深刻化し、反作用的に革命的ポテンシユアルを蓄積させてゆく。後進地域における農民および労働者は、チャーティスト時代のイギリスと一九〇五年のロシアにおける労働者階級と殆んど類似的状態にある。かれらは伝統的過去から切断されて、工業化のうち克ち難い条件のなかに迷い込み、心理的に極度に不調整なアナキズム的感情を発酵させつつある。とくに注意すべきことは、植民地支配の効果が、工業化の初期的段階と多くの点でひとしく、植民地支配に対するプロテストが、工業化に資本主義のあらゆる害悪を外国支配、もしくはそれと結びついた伝統的支配階級へと投射されることである。こうしたいわばなまの心理的メカニズムが政治的コミットメントを求めるとき、文盲である農民と労働者は、マルクスが理論的言語で定式化したものを心情的に受けとめる。それゆえ、かれらにとつてみれば、マルクス主義こそきわめて自然的イデオロギーであるといえよう。

もとより、《先進的》な人びとよりも、《後進的》な、政治的に洗練されてない (unpoliticized) 人びとにとつて、マルクス

主義が一層魅惑的であるという理由はない。⁽¹⁰⁾それはたかだか、疎外されたインテリゲンチアを《ポテンシユアル・コミュニティ》⁽¹¹⁾へ転向させ、かれらのパーソナルな心理的テラピー作用として役立つのみであろうかも知れない。しかしより重要なことは、右にみたような工業化しつつある社会内部の《マルクス主義的状况》へのリアクションの仕方であり、しかも今日後進地域の場合、外部からのマルクス主義のインパクトは、ソヴェトあるいは中国を作業モデルとして、もはや工業化過程での巨大な試行錯誤のコースを辿る必要なく、直接に共産主義の《最高段階》を引き継ぎ得る可能性を印象的に刻みつけている。⁽¹²⁾だが、いずれのモデルを選択しようと、それに付きまとう社会的・人間的犠牲を考慮しなければならず、A・インケルスが正しく指摘するように、「究極的選択は道徳的・政治的選択であつて、科学的方法によつて決定され得るものではない。《マルクス・レーニン主義の科学》であつても例外ではない」⁽¹³⁾のであるが。

後進地域における工業化の方法は、イギリスの場合のように、工業化に見合つた制度的枠組を備えながら、労働者階級を工業的社会へ成功的に編成してゆくか、ロシアの場合のように、ツァーリズム——それ自体が工業化への障壁であり、それを不完全に遅らせていた——にとつて代つて、マルクス主義が工業化を強行し、労働者階級を工業的社会に強制的に編成してゆくか、いずれの方法によろうと経済発展のペースと工業主義への社会的・人間的適応の問題を内包し、まさに《マルクス主義的状况》の解決いかんにかかつている。その部分的な、不徹底な解決は、部分的問題を取り残すこととなる。その際、どのような政治体制がつくられるかを決定論的に論ずることはできない。今日、われわれは後進地域における「デモクラシーの運命」⁽¹⁴⁾について悲観的に語るのがつねであるが、といつてそこに最頻的にみられる権威主義的・民族主義といったものがあるわけではない。⁽¹⁵⁾しかしながら、いかなる犠牲を払おうとも、経済的發展計画を前提とするならば、経済發展に強くコミットしたひとつ、あるいはひとつの支配的政党のみが、發展のイデオロギーを有効に生かすことができるであろう。⁽¹⁶⁾いか

なる政治体制も、まさにそれがあたえるべき個人の諸要求の実現と、より多くの人間的価値の充足とをめざして変革されねばならない。この点で、後進地域の未来にとつて、「経済的・技術的あるいは政治的援助によつて解決されるべき問題は、人びとが成就しようとする種類の政治体制に自覚的に気付く〈充分の見込み〉をもつことができるように、それに必要なさまざまな段階を通過する移行の速度を速めてゆく問題である⁽¹⁷⁾」といえよう。

マルクス主義のダイナミズムは、西欧からロシアへと移行し、そこでの工業化の実質的完成にともなつて、次第にそのポテンシアルは無力化する傾向にある。いまやソヴェト・ロシアにおけるマルクス主義は、その生命の源泉を、植民地帝国主義に代つて後進地域に見出して、エネルギーの保存をつづけようとしている。他方また、中国において現在成果を収めつつある共産主義は、明確にマルクス主義の第三の、アジア的段階を劃するものであり、中国の実験は、端的にいつて、共産主義⁽¹⁸⁾に急速な工業化という等式の極端なパターンを特徴するであろう。第二次大戦後の共産主義は、もはや古典的マルクス主義にかかわりなく、その妥当性を「全ヨーロッパ的プロレタリア革命についてのマルクスの偽りの予言からの離反⁽¹⁹⁾」——一九一七年十月、農業国ロシアに起つたものをアクチュアルな世界的發展傾向と関係づけるために遂行された離反⁽¹⁹⁾——から引き出して、世界的パースペクティヴに徘徊する「妖怪⁽²⁰⁾」となり得た。後進地域が究極的にソヴェト圏内にひき入れられるかどうか——そのリアルな可能性をわれわれは考慮しなければならないが——は、国際政治の場面での相対的力関係によつて規定されるであろう。われわれはここで、工業化過程の移行的段階において、外側からのマルクス主義のインパクトと内側でのマルクス主義的状况へのリアクションという複合的緊張関係におかれている後進地域の政治・経済体制のひとつの基本的問題の核心を衝いて、社会的タイプであれ人間的タイプであれ、D・ラーナーの表現を借りていえば、⁽²¹⁾真に移行的なもの、まさにそれがなろうとするものによつて動態的に規定される、とだけ言つておきたい。

(一) Ullam, op. cit., p. 272.

- (2) こうした傾向は *sluznashchie* (被雇用者) と呼ばれる集団群——ホワイト・カラー、技術専門家、科学者、文化人、行政最高幹部をも含めて一〇〇〇万人におよび——を意味した読者たみられる (Daniels, *op. cit.*, p. 279.)
- (3) Uiam, *op. cit.*, p. 278.
- (4) Morris Wainick, "The Appeals of Communism to the Underdeveloped People," B. F. Hoelitz (ed.), *The Progress of Underdeveloped Areas, Chicago, The University of Chicago Press, 1952*, p. 162.
- (5) 〇〇〇の著者などによってなされた著書は *Malcolm D. Kennedy, A Short History of Communism in Asia, London, Weldenfeld & Nicolson, 1957*; J. H. Brinnell, *Communism in Southeast Asia. A Political Analysis, London, Oxford University Press, 1959*; Frank N. Trager (ed.), *Marxism in Southeast Asia. A Study of Four Countries, Stanford, Stanford University Press, 1959*.
- (6) Bendix, *op. cit.*, p. 436.
- (7) Hugh Seton-Watson, *The Pattern of Communist Revolution: A Historical Analysis, London, Methuen & Co., 1953*, pp. 328-339.
- (8) Uiam, *op. cit.*, p. 243.
- (9) *Ibid.*, p. 284.
- (10) John Plamenatz, *On Alien Rule and Self-Government, London, Longmans Green and Co., 1960*, pp. 178-179.
- (11) Lucian W. Pye, *Guerrilla Communism in Malaya, Princeton, Princeton University Press, 1956*, Chap. 5.
- (12) もともと、経験的には、経済発展はイデオロギーにより決定されないのである。かえって土着の経済的・社会的諸関係と対立するイデオロギーに固執することは損失を招く結果となる。インドと中共、西独と東独、それぞれの経済発展とイデオロギーとの相関性を比較研究したものとすべし。Wilfred Malenbaum and Wolfgang Stolper, "Political Ideology and Economic Progress: the Basic Questions," *World Politics* Vol. XII, No. 3 April, 1960, pp. 413-421. 訳載中。
- (13) Alex Inkeles, "The Soviet Union: Model for Asia," *Problem of Communism*, Vol. VIII, No. 6, November-December, 1959, p. 38.
- (14) ドナルド・ワナー・レヴィ, "The Fate of Democracy in Southeast Asia," *Far Eastern Survey*, Vol. XXVIII, No. 1 February, 1959, pp. 25-29.
- (15) Plamenatz, *op. cit.*, p. 107. しかしながら、R・ヘーモンズが言うように、後進地域において、共産主義が西欧化に代る近代化の方法であるという命題は普遍化されえよう。経済発展は近代的タイムの自由主義的デモクラシーに必要な基礎をあたえるものであるとしても、前者が後者に帰結されるという議論はかならずしも成立しない。後進地域の場合、経済発展のための直接的方途は、むしろ権威主義的体制によつて導かれるところ。著者がより前を導く (Rupert Emerson, *Representative Government in Southeast Asia, Cambridge Mass., Harvard University Press,*

1956, pp. 186-187.)

- (9) J. J. Spengler, "Economic Development: Political Preconditions and Political Consequences," *Journal of Politics*, Vol. XXII, No. 3 August, p. 413.
- (17) Hadly Cantril, *Human Nature and Political System*. New Brunswick, N. J., Rutgers University Press, 1961, p. 46.
- (18) Ulam, *op. cit.*, p. 295.
- (19) Robert C. Tucker, "Russia, the West, and World Order," *World Politics*, Vol. XII, No. 2 October 1959, p. 19.
- (20) Zbigniew Brzezinski, "Politics of Underdevelopment," *World Politics*, Vol. IX, No. 2 October, 1956, p. 69.
- (21) Daniel Lerner, *The Passing of Traditional Society: Modernizing The Middle East*, Glencoe, Ill., The Free Press, 1958, p. 72.